令和元年度第１回

浦安市総合教育会議

議事録

令和元年７月25日（木）午後４時

於：文化会館大会議室

浦安市 企画部 企画政策課

令和元年第１回浦安市総合教育会議

概要

１．開催日時　　令和元年７月25日（木）午後４時～午後５時

２．開催場所　　文化会館大会議室

３．出 席 者

（委　員）

内田市長、鈴木教育長、川端教育委員、宮澤教育委員、舘教育委員、宮道教育委員

（事務局）

企画部長、企画部次長、秘書課長、企画政策課課長補佐（司会）、企画政策課主任主事（２名）

健康こども部長、健康こども部次長、こども課長、保育幼稚園課長

教育総務部長、教育総務部参事、教育総務部次長、教育総務課長、教育政策課長、教育施設課長、学務課長、学務課主幹、指導課長、保健体育安全課長、教育総務課課長補佐、教育総務課主任主事

生涯学習部長、生涯学習部次長、生涯学習課長、生涯学習課主幹、青少年センター所長、市民スポーツ課長、郷土博物館長、高洲公民館長、中央図書館長

４．議　　題　　浦安市教育大綱について

５．議事の概要

(1)　開会

(2)　市長挨拶

(3)　浦安市教育大綱について

浦安市教育大綱について、各委員が意見を述べた後、意見交換を行った。

(4)　閉会

５．会議経過

司　　会：　ただいまより令和元年度第１回浦安市総合教育会議を開催いたします。

ここで、傍聴の皆様にご案内いたします。会議の傍聴に当たりましては、傍聴券の裏面に記載してある遵守事項を守っていただきますようお願いいたします。

それでは、第１回浦安市総合教育会議の開催に当たり、内田市長よりご挨拶がございます。

市長、よろしくお願いいたします。

市　　長：　教育委員の皆様におかれましては、日ごろより本市の教育行政、また、子どもたちのためにお骨折りいただきまして、ありがとうございます。

会議の開催に先立ちまして、一言ご挨拶を申し上げます。

野田市で小学生が自殺をして、いじめの有無を調査するため第三者委員会を設置するという報道が本日ありました。子どもたちを取り巻く環境が日々変化していく中で、子どもたちの将来を考えて、様々な面でやっていかなければならないことが山積しています。

教育の分野におきましても、新たな総合計画のもとで教育施策を一体的に推進するために、市長部局と教育委員会が方向性を共有し、連携・協力を図りながら、全ての教育の総合的な指針となる新たな教育大綱の策定に取り組む必要があります。その前提として、浦安市では急激に高齢化が進展し、今後、子どもたちの教育環境の変化が予想される中で、学校の統廃合をどうするのか、教育の質や公平性をどのように確保していくのか、教員の多忙化に対してどのように取り組んでいくのかなどを考えていかなければなりません。昨年度この会議でもお話ししましたが、今年度の総合教育会議において、新たな教育大綱の策定に向けて皆様からご意見をいただきたいと考えています。本日は、第１回として、策定に当たっての基本的な考え方などを説明させていただき、第２回に提示する予定である素案の作成に向けて、委員の皆様から忌憚のないご意見をいただきたいと思っていますので、どうぞよろしくお願いします。

司　　会：　それでは、本日の議事に入ります。ここからの議事進行は、内田市長にお願いします。

市　　長：　それでは、議事に入ります。

本日の議題は、浦安市教育大綱の策定についてです。

本日の議事の進め方については、初めに、企画政策課より議題について説明させていただいた後、委員の皆様からご意見やご感想、また、様々なご助言を賜りたいと思っています。皆様からご意見をいただいた後、自由な意見交換の場としたいと思います。

それでは、企画政策課より説明をお願いします。

企画部次長：　浦安市教育大綱について説明させていただきます。

資料１－１をご覧ください。まず、「(1) 策定の背景」について、現行の教育大綱の策定状況を説明いたします。

平成26年６月に地方教育行政の組織及び運営に関する法律が一部改正され、地方公共団体の長に教育等に関する施策の大綱を策定することが義務づけられました。これを受けまして、本市では平成28年４月に教育、学術、文化の振興に関する総合的な施策や子ども・子育て支援など円滑に推進するための目標、また、施策の方向性を示す浦安市教育大綱を策定し、その後、様々な施策事業を実施してきました。

続きまして、「(2) 教育大綱の位置づけ」について、下段に図で示しています。国の教育振興基本計画を参酌しつつ、浦安市総合計画のもとに浦安市教育大綱を策定し、部門別計画として教育ビジョン、就学前「保育・教育」指針、子ども・子育て支援総合計画、生涯学習推進計画が位置づけられています。

続きまして、２ページをご覧ください。

「(3) 現行の教育大綱の目標及び施策の方向性について」、現行の教育大綱では、２つの目標を掲げています。

まず、１つ目の目標は、「『未来に向かって夢を持ち、豊かに生きる浦安っ子』を育てます。」であり、こちらでは乳幼児期の教育・保育の充実、学校教育期の教育・育成の充実、さらには教育環境の整備・充実を施策の方向性として示しています。

２つ目の目標は、「『自ら学び　ともに高め合い　地域に生きる　生涯学習』の実現を推進します」であり、こちらは学習機会の充実と学習成果を生かす環境づくり、生涯スポーツの振興、ふるさと浦安の文化・芸術の振興という点を施策の方向性として示しています。

以上が現行の教育大綱に関する説明となります。

続きまして、３ページをご覧ください。「(4) 策定にあたっての基本的な考え方」で新たな教育大綱の策定に対する考え方を記しています。

先ほど市長からご説明がありましたように、本市では現在新たな総合計画の策定に向けて取り組んでおり、今年12月の策定を目指しています。現在の教育大綱は、計画期間を設けていませんが、新たな基本構想や基本計画との整合を図る必要があると考えています。

こちらに記載している基本目標１「育み学び誰もが成長するまちへ」については、現在検討中の基本構想における教育に関する分野の基本目標です。このような総合計画における将来都市像や基本目標等を踏まえながら、本市が目指す教育の総合的な方針を定めていきたいと考えています。

最後に、教育大綱策定までのスケジュールについて説明させていただきます。「(5) 策定までのスケジュール（案）」をご覧ください。

本日、第１回の総合教育会議で委員の皆様からご意見をいただいた後、事務局で素案を作成します。10月上旬に予定している第２回総合教育会議で素案をお示しし、その後、パブリックコメントを実施し、教育大綱の原案を作成します。１月には第３回の総合教育会議を予定しており、こちらで議論いただいた後、教育大綱を策定したいと考えています。

説明は、以上です。

市　　長：　皆様に新しい教育大綱のたたき台すらお示ししていない中で、ご意見をいただくのは難しいと思いますので、現行の教育大綱を振り返っていただいて、また今回皆様にお示しした総合計画を見ていただいて、強調した方がいい部分、またはこれがタイムリーではないか、これをカットした方がいいというようなものを含めてご意見等をいただければと思います。

たとえば、資料１－１の２ページに現行の教育大綱の中で、「乳幼児期の教育・保育の充実を図ります」と書いてありますが、乳幼児期の教育と保育の違いがはっきりしません。文部科学省や厚生労働省も言葉をはっきり使い分けていないように感じられ、保育の無償化のことを幼児教育の無償化と呼んだりしています。用語１つとっても考えていかないといけません。

皆様が日々の業務の中で、また、地域の中で感じていることを率直にこの場でご発言いただきたいと思っておりますので、初めに、鈴木教育長からお願いします。

教 育 長：　市の基本構想がまちづくりの基本方針となるのに対して、教育は人づくりであると考えています。そのため、「人が輝き躍動するまち・浦安」のサブタイトル「すべての市民の幸せのために」というのは、とてもよい表現だと思っています。

新たな総合計画を受けて、教育委員会において教育振興基本計画を策定する中で、子どもだけでなく、市民のコミュニティも含めて人づくりを大事にしていき

たいと考えています。本市は成熟期を迎えたことから、ハード面はもちろんのこと、それ以上にソフト面を大事にしていきたいと考えています。

以上です。

市　　長：　続きまして、川端委員、お願いします。

川端委員：　大綱で掲げられた目標を実現していくことが大切です。実際、大綱に書かれている内容が現場の先生方の日々の指針となり、教育委員会の様々な問題を考えるときの基本となるものにしていかないといけないと思います。

また、大綱では教育分野の各項目が網羅されていますが、この重みづけをどうするか考える必要があります。たとえば、学校教育に関しては、何度も教育委員会の会議で言ってきましたが、テストの平均点を上げるのではなく、勉強ができない子を極力救っていくことが必要です。基礎科目の決められたカリキュラムの内容が分からないままに学年が上がっていく子どもたちがいなくなるように学校教育で対応してほしいと思っています。勉強ができる子についても、塾に通うなどそれぞれ対応しているところはあると思いますけれども、基礎概念が分からない子どもたちに対してもう少し支援してもよいのではと考えています。そのためには、実態がどうなっているか目を向けなければいけませんし、教育振興基本計画等を策定する中で、確かな学力を身につけるためにはどのようにするか検討する必要があると考えます。１つ１つの項目を大切にしながら、教育大綱に書いてある内容を現実化していきたいと思います。

市　　長：　続きまして、宮澤委員、お願いします。

宮澤委員：　浦安市が今後進む方向性を打ち出していくに当たり、国や県が定めた制度の中で何かにチャレンジしたり、オリジナルのものをつくる難しさがあると思いますが、先日定例会でお話させていただきましたように、子どもの不登校について、学校制度の中でこれまでとは違ったことをしないといけない時期に来ているのではないかと思っています。先ほど市長からお話がありましたが、自ら命を落とす子どもたちがいる中で、この問題を切実に考えて、市独自で対応を打ち出してもよいのではないかと考えます。そのような子どもたちの目線に立って考えたときに何ができるか考える必要があります。

また、外部指導者を入れるなど、部活動のあり方が変化しており、画一的な指導をしがちな部活動からスポーツへと変わっていくかもしれません。児童育成ク

ラブに通う子どもたちには、様々な可能性を持った子たちがいます。その中からプロ野球選手やプロサッカー選手が出てきているのをこれまで見てきているので、その可能性に何かタッチできないかと考えています。

昨日、エンターテイメントをやっている方にお会いしたのですが、その方は教育者もエンターテイメントが必要だと言っていました。私は、違う道に行きましたが、学校の先生になりたいと思っていました。指導者を育てることについて、やはり教育実習だけだと難しい面もあるため、学校ではないコミュニティで子どもたちを教えた後、学校に戻ったりするとまた違うのではと思います。

以上です。

市　　長：　続きまして、舘委員、お願いします。

舘 委 員：　先ほど教育長がお話されたように、教育は人づくりに尽きると思いますが、今の子どもたちにどのようになっていってほしいかということを考えると、多様性を認めて、小さなことも幸せに感じることができる感性を身につけてほしいと思っています。そうすれば、どんなことにも挫けず、次に向かって努力していけるのではないかと思います。そのために教育はどうあるべきかということを考えていくと、先生方の負担が重いという問題に行き着きます。もう少し先生たちの環境をよくしていかなければならないと思っています。

たとえば、クラブ活動で外部から指導者を呼んでくるとか、少人数にすればよいとかそのようなことで済むことではないと思います。宮澤委員がおっしゃったように先生にエンターテイメントが必要なことはよく分かりますが、今の先生たちにそのようなことを求められないほど大変だと思います。

そのような状況であるため、小学校では全ての科目を１人の先生が教えていますが、得意な科目は別の先生が教えるなどもう少し柔軟に対応することが必要かもしれません。子どもたちの特性をきちんと拾うことができる先生を多く育てることが、学校教育の中で非常に重要になってくるのではないかと学校訪問に行って強く感じます。

あわせて、要支援の子どもたちが徐々に多くなってきていると感じています。要支援の子どもたちに対しても充実した体制を取っていると思いますが、多様性を認めるために、様々な子どもたちと交流させていくことも考えていかなくてはいけないのではないかと思っています。

家庭教育として最低限やってほしいことができない家庭が徐々に増えてきており、学校に任せてしまうことがとても気になっています。この点については文部科学省も言及していませんし、学校を運営していくに当たり、この課題をどうするのか考える必要があります。家庭で子どもたちをきちんと見て、よいところを褒めてあげてほしいです。基本的なことですが、家庭教育に無関心すぎてどうするのだろうと思っています。

市　　長：　続きまして、宮道委員、お願いします。

宮道委員：　日頃教育委員の皆様と情報交換する中で、多様性をいかに認めていくかがますます重要になっていくと思っています。学校の中を見ると、要支援の子や不登校の子どもたちも含めて、大勢の中に入っていけない子どもたちに対してどのようなアプローチができるのか、そのバリエーションを社会としていかに育んでいくのかが非常に大きな課題であると思えてきます。

個人的に関心があるのは、浦安市ではこれから高齢化が進んでいく中、地域には様々な分野に長けて活躍されている方が多くいることから、このような人材をいかに子どもたちの教育につなげていくことができるかということです。また、その人たち自身が生涯学び続けながら、まちづくりなどに関わることができる仕組みを作っていくことは非常に重要だと思っています。

教育長のお話にもありましたが、ソフト面が豊富なところが浦安市の強みで、浦安市でしかできない、浦安ならではの人づくりについて、いま一度知恵を絞って考えいきながら、大綱に盛り込んでいただきたいと思います。

市　　長：　ありがとうございます。

今、宮道委員からもお話がありましたが、地域の人材を子どもたちの教育につなげていくことについて、部活動の先生や指導者などをお願いすることも考えられます。

また、団塊の世代と言われている方々は、核家族が多く、その子どもたちの世代や、その次の世代にあたる小中学生の保護者の世代でも核家族が多く見受けられます。そうすると、ほとんどのご高齢の方は、ふだん孫と接していないため、子どもたちとの接し方が分からないのではないかと思います。同様に、子どもたちもご高齢の方との接し方が分からないのだと思います。核家族が多いことによる問題が今後一層顕在化してくるのではないかと思っています。たとえば、本市

の職員でも、若い職員の多くは火葬場へ行ったことがないと思います。浦安市は核家族が多いことから、人は年を取って死ぬという実感を持つ若い人が一層少なくなっているのではないかと感じます。人が亡くなるときに悲しい思いをすることによって、人は優しくなり、強くなっていくと思います。おじいちゃんやおばあちゃんが亡くなっても、お父さんやお母さんが帰省して、子どもはそのまま浦安に残るとなると、仏壇にお線香をあげることや、人が亡くなることがどのようなことかも知らないことになるかもしれず、このようなことが浦安市の１つの特殊性なのかもしれません。強いて言えば、ご高齢の方が子どもたちとの接し方が分からず、子どもたちも接し方が分からない、子どもたちの親は子どもをどのように接しさせていいのか分からないし、ご高齢の方にこのようなことをしてほしいという言い方も分からないようになります。このように世代間のつながりが希薄なことについて、教育大綱の中に位置づけて、取り組んでいくことも考えています。

最近、様々な方からご意見をいただく中で、地域、家庭そして学校の関係をどのように考えていくのかということが１つのキーになってきていると思います。この点について、どのような関係が理想なのか議論いただきたいと思います。

川端委員、お願いします。

川端委員：　私自身が高齢になってきましたが、機会がなく、現状としていま一つ子どもたちと触れ合えていません。生涯学習を推進する中で、自分たちのスキルアップも大切ですが、市として高齢の方々が子どもたちと触れ合えるようなことを企画して、世代間のギャップを埋めていくことが必要かもしれません。

子どもをかわいいと感じることは多くあります。私の眼科の患者は、６歳以下が約15％、小学生が３分の１ほどの割合ですので、小児科のように多くの子どもたちが来院します。小さい子どもは、最初入ったときは何されるのだろうと泣いていますけれども、多くのお子さんは、診療が終わって出てくるとニコニコしています。最初は違和感があり、難しいかもしれませんが、自然な形で交流できる機会を作ってほしいと考えています。

市　　長：　スポーツの世界では、高齢の方と子どもたちの交流はあるのでしょうか。

宮澤委員：　スポーツは大人が子どもに教えていくため、常に年上の方と触れているし、サッカーでは大人たちと試合をするなど触れ合える場を意識して作っています。高

齢者と子どもたちはスムーズに交流できると思います。

市　　長：　宮道委員のご意見はいかがでしょうか。

宮道委員：　地域スポーツクラブは、子どもから年配の方まで参加可能で、海外では「俺はここのクラブを出たんだ」と写真を額に飾るなど皆が地域のクラブを誇りに思い、地域がつながっていくのだと思っています。浦安でも統合型地域スポーツクラブが６クラブあるため、それを活用してスポーツだけでなく、カルチャーの部分も取り入れていけば、そこから世代間の交流へとつなげやすい気がしています。少しずつ学校と連携させて、コミュニティを醸成していくと、地域の中にそのような風土ができていくのではないかと思います。

市　　長：　舘委員、お願いします。

舘 委 員：　高齢者の方々が子どもたちとコミュニケーションを取れないことはないと思っています。昔遊びをやっていると、おばあちゃんたちは子どもと接するのがとても上手です。孫がいる、いないに関係なく、その子どもたちのお母さんの気分になってコミュニケーションを取るので、とても上手です。その一方、おじいちゃんたちは仕事をまだ背負っているような感じで、難しい言葉を使ってしまうので、まず言葉で引っかかってしまいますが、場数を踏んでいくと徐々に使う言葉もこなれていき、おじいちゃんたちもコミュニケーションを取ろうと頑張っていると思います。

子どもたちも最初は、少し難しい言葉を使う人だと感じていると思いますが、技術力が求められるけん玉などの遊びを教えるのがとても上手なので、子どもたちも楽しんで、満足しています。変な威厳みたいなものはなく、おじいちゃん、おばあちゃんたちは、とても楽しい時間を過ごしてくれた方たちという印象を持っていると思いますが、このような交流は、上の学年まではなかなか続いていきません。

文部科学省では、地域と家庭、学校が連携して学校の運営に取り組むコミュニティ・スクールを推進していて、災害時にも学校と地域が一体となった対応などが期待できると説明しています。浦安高校では導入されていますが、コミュニティ・スクールを導入している小学校・中学校を実際に見たことがないため、どのように運営しているのか教育委員会で見に行こうかという話になっています。浦安市は災害に決して強いまちではありませんので、参考にしていくことが必要な

のではないかと思っています。

市　　長：　文部科学省は、コミュニティ・スクールを導入すると災害に強いと説明していますが、実際その場になるとどこまで役立つのかは分かりません。

先ほど学校はオリジナルな方向性を出した方がよいのではないかと宮澤委員からご意見をいただいていますが、不登校、特に先ほどお話させていただいたように子どもがいじめで命を自ら絶つことはあってはならないことで、教育委員会や市長部局だけでなく、市民全員の願いであって、絶対になくさなくてはいけないことだと思っています。

先生の多忙化やモンスターペアレンツなど様々な問題がある中で、学校はこれからどのように対応するべきなのでしょうか。地域との関わりなど様々なことが求められる中、学校はどのように変わっていくべきなのでしょうか。

教育長、ご意見をお願いします。

教 育 長：　先ほど市長からお話がありました浦安市の核家族の特徴について、私も同感しています。親子の人間関係を含めてコミュニケーションがうまく取れないように感じられ、虐待などが起こっても逃げ場がないため、社会全体で子どもたちを守っていかないといけないと思います。

また、先ほど舘委員からお話がありました高齢者と子どもの交流は、保育園など幼児期は必ずやっていますが、小学校に上がった途端なくなります。学校教育は、文部科学省で学習内容や時間数が決められていて、検定教科書を使わないといけないなどがんじがらめです。この仕組みは国によって定められた制度であるため、その中で市としてできることは、生涯学習と結びつけることだと考えています。たとえば、書写は教室でやらなくても、近くに公民館があるのであれば、書道の道具を持って公民館へ行って、そこで書道のサークルの先生たちと一緒にやることも１つのアイディアです。学校教育の中に様々な大人を入れることで先生方も見方が変わります。

先ほど市長が心配されたように、子どもたちは、普段おじいちゃん、おばあちゃんと触れ合っていないため、交流させていかないといけないと思います。先ほど川端委員がおっしゃったように、交流できる機会をもっと取り入れていきたいと思っています。

市　　長：　子どもたちとご高齢の方々が最もうまく交流しているのは、将棋道場だと思い

ます。そこでは年齢は関係なく、対等なところがあり、子どもに負けておじいさんたちが悔しがっています。学校教育、生涯学習、社会教育など教育の場や地域で、そのような子どもと高齢者の共通項をどのようにすれば見つけられるのでしょうか。

また、島根県益田市では、地域のおじいちゃん、おばあちゃんが漢字の書き取りや算数など子どもたちの宿題を見てあげているようです。そのような仕組みがあってもよいのではないかと考える中、学校はいかに地域に開放されていくべきなのでしょうか。

宮道委員、お願いします。

宮道委員：　公民館などを使って実施している浦安市の青少年自立支援未来塾は、非常によい試みだと思います。教育にはお金がかかり過ぎてしまい、経済の格差がそのまま反映されてしまっていると感じるところもあるため、公民館や学校などを使って、ボランティアでご高齢の方にお手伝いいただきながら、勉強を教わるなど地域の力をうまく借りるような仕組みができたらよいのではないかと思います。

舘 委 員：　公民館が使われるのはよいことだと思います。逆説的ですけれども、子どもも親も学校を絶対だと思わなくなれば、かなり楽になるのではないかといつも思います。逃げ場がないって思わざるを得ないような、義務感で押しつぶされてしまっているのではないかという気がしています。たとえば、学校に行かなくても公民館でおじいちゃんに教えてもらえばよいとすると、ずいぶん心が楽になると思います。

宮澤委員：　今のご意見について、先日放送された番組によると、不登校などの生徒の中で、学校に行けない理由が２つ以上ある生徒が49％で、３つ以上ある生徒が35％いました。その理由は、クラスに友達がいない、コミュニケーションがとれない、宿題ができない、授業が分かりにくい、幽霊と呼ばれて避けられたなど様々です。教室に行くだけでもすごく嫌なのに、髪型だけでなく、使用する文房具が指定されるなど学校で多くの決まりなどがあることや、学力向上至上主義などが問題として挙げられていました。そもそも小学校で約３割、中学校で約６割の先生が過労死のラインに入っているほど忙しい状況を考えると、先生が生徒との関係をよくすることは難しいと思います。

私の父は、学校のような四角い建物に毎日いるのは限界だと感じる人でしたの

で、父に学校に行きたくないと言ったら、「俺も行きたくない」と言われました。サッカーがあるし、まずいと考えて結局学校に行くのですが、そのような考えがあると子どもは非常に落ち着くのだと思います。また、先ほどの番組では、広島県のある学校で取り組んでいる、ふれあいルームというフリースクールが取り上げられていました。好きな時間に登校して、そこで先生や友達と接して帰っていくのですが、そこには担任の先生のように勉強を教えてくれる先生もいて、そこから卒業生も出ています。

市　　長：　川端委員のご意見はいかがでしょうか。

川端委員：　不登校問題については、基本的に自由な部分を取り入れていくべきだと思いますが、自由にしたことにより生じる問題も考えられるため、どこまで自由を保障できるかあわせて考えていかないといけないと思います。

　また、柔軟な考え方を持って、自分の教え方を振り返ることができる人は、先生に向いているかもしれませんが、教育の経験がない人が自分のペースで教えるのは難しいと思っています。適応指導教室では、退職した校長などが指導していますが、他にも教えることができる方はたくさんいると思っており、そのような方が活躍できるよう育成していけるようなシステムを作っていく必要があると思っています。

市　　長：　川端委員から先生の資質と言いますか、先生に向いている、向いていないという話がありましたが、先生という職は、サラリーマンでよいのか、それとも聖職と呼ばれる昔ながらの人生の先達としての役割を担うべきなのか、どちらなのでしょうか。

川端委員：　サラリーマンと言うと、お金を稼ぐために仕事をしているように感じられますが、日本のサラリーマンの多くは、それよりも自分のやっている仕事に生きがいを感じながら仕事をしているように思います。

市　　長：　先生にとってのお客さんは、子どもたちなのでしょうか。あるいは親なのでしょうか。学力を上げてほしい親だとすれば、子どもが何と言おうと学力を上げるために様々なことをやっていくこととなります。あるときは先生に聖職としての役割を、あるときは何時から何時までの間でこれだけのノルマをやりなさいというようなサラリーマンのような厳格さをと、その両方を先生に求めていることが先生の多忙化や、先生を押しつぶしてしまう根源にあるような気がします。先生

は、何のために、どちらの部分を重要視した方がよいのでしょうか。

教育長、先生の立場からいかがでしょうか。

教 育 長：　先日、市長がミーティングの際に、日本の教員はこの仕事に満足している割合は高いレベルですが、もう一度仕事を選べるとしたら、また教員になりたいと答えた割合が海外の平均を大きく下回っているとのお話をされました。私ももう一度教員をやるかと言われたら、30年前でしたらやると言いましたけれども、今の状況ではなかなか難しいと考えています。

先生の多忙さを解消するには、１人の担任が全教科を指導するのではなく、教科担任制を導入するなどシステマティックにしていく必要があります。

市　　長：　なぜ昔はうまくいっていたのでしょうか。

舘 委 員：　私が小学生の頃と比べて、教科書の分量が多いように感じられます。それぞれの科目で取り上げる内容や科目数が増えて、先生の負担が大きくなっていると思います。

市　　長：　先生１人当たりに対する子どもが多かったため、昔の先生も忙しかったはずですが、先生の多忙化が今のように話題にはなりませんでした。昔と比べて何が問題となっているのでしょうか。たとえば、作成するべき書類が多すぎるというのであれば、問題を解決するため、浦安市では抜本的に作成する書類を減らすという方向性を打ち出すことも考えられます。

宮澤委員：　時代が変わってきて、子どもたちにも時間がないのかもしれません。子どもにもよりますが、様々な習い事があったり、パソコンやスマートフォンが出てきて、私が小さい頃よりも自分のことを考えることが少なくなってきているように感じられます。

市　　長：　いつの時代も次の時代を作っていくのは子どもたちであるし、人間は一生学び続けなければいけないのであって、勉強するだけでなく、精進して高められるような欲望を持っていないといけないと感じています。

最後に皆様にご案内があります。８月14日・15日に舞浜アンフィシアターにおいて、eスポーツの高校対抗の全国大会であるＳＴＡＧＥ－０が行われます。浦安市教育委員会も後援していますので、教育委員の皆様の中で希望される方は、お越しいただければと思います。昔は、漫画をあまり読まないようにと言われていましたが、今や漫画は日本を代表する文化だと言われており、eスポーツも新

たな文化に発展しつつあります。高校対抗でやるのは今回が初めてで、「リーグ・オブ・レジェンド」、「フォートナイト」、「クラッシュ・ロワイヤル」という３種類のゲームで行う、いわばeスポーツの甲子園です。これからプログラミング教育が必修化される中、舞浜で開催されることが浦安市の１つの強みになると思っております。

最後に、事務局から連絡事項をお願いします。

司　　会：　次回の総合教育会議の開催については、10月上旬を予定しています。近くなりましたら事務局よりご案内いたしますので、よろしくお願いします。

市　　長：　以上をもちまして、第１回の総合教育会議を閉会させていただきます。

貴重なご意見をいただき、ありがとうございました。

午後５時00分　閉会